境界線－リアルとネットのその間－

八千草楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
境界線ーリアルとネットのその間ー

【Ｎコード】
Ｎ２８７６Ｉ

【作者名】
八千草楓

【あらすじ】
ひょんなことからネットゲームに手を出すことになった主人公、相馬理緒。
理緒がやり始めたネットゲームと、現実での交差する話。
恋愛、結婚、不倫、その果てにあるものとは・・・？

この小説に登場する人名等は、実在する人物とは関係しない、フィ

クション作品です

プロローグ（前書き）

初投稿作品になります。
お見苦しい点も多々あると思いますが、温かい目で見ていただけると嬉しいです。
誤字脱字の報告もお待ちしております。

プロローグ

そう、それは彼の一言から始まった物語。

「ねぇねぇ、現実逃避したくない？」

仕事も、恋愛も、すべてに疲れていた私にとってその言葉は興味的なものだった。

・・・そして私は彼の手を取る。

出会い

アイツとの出会いは、私、相馬理緒が就職してすぐのことだった。

私は専門学校を卒業し、今まで夢だった作業療法士というリハビリの仕事に就いた。
就職先は一般的には老人ホームと言われるところで、正式には介護老人保健施設。
都会育ちの私からすると、ど田舎といってもいいところに、なりゆきで就職してしまった。

就職する前から「1人での仕事になるけど頑張ってね」そう面接官に言われ、自分のやりたい事等、これからの仕事に夢と希望を持って田舎へ行った。

が、現実はそう甘くなかった。

医者、介護士、看護士、栄養士、事務員など、様々な職種がいる中で、自分の仕事がどのような仕事で、どういった事をするのかを広めながら自分のやりたいことを貫き通すのは大変な作業だった。

思ったように進まない仕事。
自分の理想とはかけ離れている、自分の今の姿。

自分がやりたいことをできない苛立ちと、日々の業務に追われ、私は自分を見失っていた。

＊＊＊＊＊

ある日のこと、作業部屋に1人の男性職員が入ってきた。

彼の名前は宮越比呂。
見たことはあるが、喋ったこともない人。
身長は高く、顔立ちも整っており、声もよく通るテノールの声。
正直いって私の好みだった。
彼はうちの職場の中心的人物で。
明るく、誰にでも気軽に声をかけ、とても気配りがきき、仕事もできる。
うちの施設に通っている患者さんからも、職員からも人気の人物だった。

それに比べて私は、そんな彼には似つかわしくないほど普通の人間で。
仕事はできないし、可愛くもない。
慣れればそれなりな人間関係は作れるけれど、今の職場には親しい人もいない。
彼は遠い存在で、見ているだけで眩しくて、話しかけることが出来るような、そんな人ではなかった。

だが、そんな人物がなぜか私の作業部屋にいる。
そして私をまっすぐ見てこう言った。

「相馬さん、仕事大変でしょ。皆君の仕事理解してくれてないし。
・・・ねぇ俺と一緒に現実逃避しない？」

「はい？」

思いがけない言葉に、私はまぬけな返事をしてしまっていた。
恐らく、言葉だけではなく顔もまぬけだったことだろう。
彼の言いたいことがわからない。
何を思って、何がしたくて、そう言ったのか。
まったくもってわからない。

そんな私の心境が通じたのか、彼はさわやかな笑顔で追加してこう言った。

「言い方が悪かったな。相馬さんさ、ゲームに興味ない？」

ゲーム・・・
私の趣味は、読書、音楽鑑賞、ネットをすること、そしてゲームをすることだった。
なので興味がないわけではなかったが、何と答えればよいかわから

なかった。

「ゲームは人並みにはしますけど・・・それと現実逃避が何の関係が？」

「お、するんだ。どんなゲームするの？」

彼は私の質問に答えていなかったが、とても嬉しそうに次の質問を投げかけてきた。
共通の趣味を持つ仲間意識が芽生えたのだろうか、彼は様々な質問を次々に投げかけてくる。

「えっと・・・ＲＰＧとか、パズルゲームとかですかね？
他のゲームも人並みにはしますけど、あまり旨くはないですね」

「ＰＲＧやるんだ、俺もやってるんだー今はまってるゲームあってね。
他にも色々やるけど、○○とか？？とか。」

戸惑いながらも相槌をうつ私に、とても興味有り気に話を聞く宮越さん。
そして彼は突拍子もないことを言った。

「じゃぁ今度俺ん家に来て一緒にゲームしようよ。」

「え？」

またしても私は間抜けな声を出した。
確かにゲームは好きだけど。
いきなり話しかけてきて、何この展開は？

しかも相手は職場のアイドル的存在。
頭の中は若干パニックで、気が付けば私は彼に気おされて返事をしていた。

「いいですよーただし、得意分野以外は下手なのであしからず」

「ほんとに！？うわー嬉しいな。じゃぁ追って連絡するから。」

そう言った彼は、持っていたメモ紙にサラサラとメアドと番号を書き、私に手渡ししてくる。

「これに、時間あるときでも空メールでも入れておいてくれると助かる～
今一応業務中だしね。」

いたずらっ子のような顔をして笑いながら、作業部屋を去っていく彼。

一体私に何が起こったのだろう？
どうして彼とメアド交換することになったんだろう？

あまりに急なことすぎて、私の頭の中には？？？マークが飛び交っていたが、せっかく渡されたメアド。
連絡しないのは失礼に当たる・・・との義務感から、空き時間を使ってメールを送ることになった。

メール

仕事の空き時間をつかって、彼にメールをしてみた。
が、業務に終われ、仕事が終わるころにはそんなことも忘れていた。
業務時間が終わり、やっと一息ついた時、ふと昼にやり取りした内容を思い出した。

作業部屋へのいきなりの宮越さんの訪問。
今まで挨拶程度しかしたことなかった、彼とのメアド交換。

きっとメール来てないよな。

そんなことを思いながら、仕事帰りに携帯を開いた。

＊＊＊＊未読Ｅメール１件＊＊＊＊

Ｆｒｏｍ　宮越比呂
件名　お疲れ様

本文　お昼はどうもありがとう～ご丁寧にメールくれてありがとうねｗ
　昼は色々質問攻めしちゃってごめんね。
　共通の趣味があったみたいで嬉しくて。

相馬さんとは趣味があいそうな気がしてさ。
前から気になってたんだけど勇気出して話してみましたw
今度予定があったら一緒にゲーム大会でもしようぜw

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

趣味が合いそうな気がしてって何だろう・・・
私そんなオタクっぽい雰囲気出してたのかな・・・？

そんなことを思いつつ返信メールを作った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ｆｒｏｍ　宮越理緒
件名　お仕事お疲れ様です
本文　こちらこそ、わざわざメールアドレス頂いて、ありがとうございました。
いきなりの展開だったので、若干話しについていけなくてすいません。
あの時は旨く言えなかったけど、ゲームは好きです。
もしお時間あったら一緒に遊びましょう～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

職場から家までは徒歩で１０分ほどのところに住んでいるため、メールを作っているうちに自宅についてしまっていた。
実家を離れて約半年。
最初は寂しかった１人暮らしにも慣れ、今では快適だとも思い始めている。
話し相手がいないのは寂しいけれど、自由に自分のしたいことができるのは１人暮らしの良い点だ。
仕事の疲れからか、自宅に着き、ソファーに座り込んでしまう。
すると、メールの着信音が静かな部屋に鳴り響いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ｆｒｏｍ　宮越比呂
件名　家に着いたかな？
本文　近いうちほんとに誘うから覚悟しておいてねｗ
　相馬さんって１人暮らしだっけ、夜は危ないので出歩かないように～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

社交辞令なのか、なんなのか、彼は私を心配してくれているらしい。
嬉しいような、でも複雑な心境。
ご心配ありがとうございます、とこれまた業務的なメールを返し、

私は夕食を作るべく台所に立った。

その日を境に、私の業務部屋への訪問が続くようになった。
そしてメールも。

話す内容は他愛もない話から仕事の話、そしてゲームの話。
様々なことを話す中でわかったことは、宮越さんはとても頭の回転が速く、真面目な人ということだった。
仕事中、わざとふざけて患者さんを笑わせたりする場面は良く見ていたが、それもすべて計算の上での行動。

「俺さ、俺の仕事って、ただ介護したりするだけじゃなくて、患者さんに笑ってもらって、気持ちよくココの空間での時間を過ごしてもらいたいんだよね～
だからさ、笑ってもらうためにはどんなことでもするわけ。
頭が悪く見えても構わない、職員にどう思われようが構わない。
患者さんが気持ちよく過ごせればそれでいいんだよね」

ある日彼はそんなことを言っていた。

介護するという仕事。
とても大変で、患者さんに怒ったりする職員もいる中で、彼の考えはとても好感が持てるものだった。
私も、ただリハビリするだけではなく、患者さんには楽しくよりよい生活を送って欲しいと考えていたから。
患者さんが楽しく施設での時間を過ごすために、なりふり構わない行動には、職員からの反感もあったようだが、それすら気にせず、ただ純粋に患者さんのために仕事をしている彼。

そんな彼にいつしか私は惹かれていた。

誘い

あれから・・・月日が経つのは早いもので、一ヶ月が経っていた。
その間、宮越さんの作業部屋への来室は毎日のように続き、メールも事あることに来ていた。

私の想いは膨らむ一方だったが、職場でまともに話すことができる唯一の人物ができて、嬉しいほうが勝っていた。
このまま良い関係が続けばいいのにと想う反面、もっと仲良くなりたいと思う気持ちもなくはない。
だが、関係が崩れてしまえば・・・私はきっとまた一人で。
それだけは避けたかったので、自ら行動を起こすことはしなかった。

そして彼が初めて訪れて来た時と同様、ソレはまた突然だった。

業務がほぼ終わり、作業部屋の片づけをしていた時。
彼も業務をほぼ終えたのか、少し疲れた顔をしながら来室してきた。

「相馬さん、明日って休みだよね？」

明日は土曜日。
私は土日祝日の暦どおりの休みなので、明日は休みだ。

「うん。明日はお休みですけど？」

「じゃぁさ、今日仕事終わったらちょっとうち来ない？」

週末はこれといった予定もないので、時間を空けることは可能。
今晩だって、家に帰れば食事、入浴があるくらいで特に何もない。
が、あまりに急の話で、いつものごとく彼の話についていくことができない。

「今日・・・ですか？」

「うん、今日。前言ってたゲーム見せようかと思って。・・・だめ？」

少し寂しそうに話す彼の様子を見て、断ることができない。
いや、元より断る気はしなかった。
彼と一緒の時間をもっと過ごしてみたいと思っていたから。

「大丈夫で「ほんと？！じゃぁ仕事終わったら家に迎えに行くから、先帰って待ってて！」」

まだ最後まで言っていないのに、途中で言葉を遮られてしまう。

が、嬉しそうな彼の様子をみて、「最後まで聞いてくださいよ」とは言う気になれなかった。

「わかりました。家に着いたらメールしますね。」

「こっちも仕事終わったらメール入れるから。それまで待ってて！」

じゃぁね！とばかりにヒラヒラと手を振り、部屋を去る宮越さん。

あの嬉しそうな様子は何なんだろう？
というか、勢いで家に遊びに行くことになってしまったけれど大丈夫なんだろうか。
彼が何を考えているかわからないが、誘ってくれたということは嫌われてはいない筈。

・・・考え込んでいても答えは出ない・・・か。

私は、一時中断していた部屋の掃除を再び始めた。

何時彼から連絡が来てもいいように、早く仕事を終わらせるために。

あの後、さくっと掃除を終わらせ、帰路に付いた私。
家に着いて、いつもなら一息つくが、今日は何故か落ち着かない。
それもそうか、今日これから宮越さんから連絡が来るのだから。

だが、私の体は素直で。

・・・ぐぅぅぅ

気持ちは落ち着かないはずなのに、そんな時でも鳴る私のお腹。
私は一人苦笑をしながら、有り合わせでさっと料理を作りにかかる。
腹が減っては～とも言うし、仕方がない。

そして料理を作り終わり、食べ始めたころに、メールの着信音が部屋に響いた。

＊＊＊＊＊＊＊

Ｆｒｏｍ　宮越比呂
件名　終わりました！

本文　今仕事おわり！これから迎えにいきます。

＊＊＊＊＊＊＊

急がなくては。
彼が迎えに来るとわかり、食べていたご飯を掻き込む。

あ・・・そういえば宮越さんは晩御飯どうするんだろう？
仕事終わりってことは、自宅に帰ってから食べるのだろうか？
もう1人分作って持っていったほうが良かったかな・・・

そんなことを思い、ボーっとしていると、窓の外でクラクションが二度鳴った。

私は我に返り、慌てて窓の外を見る。
外には見覚えのある車が止まっていた。

やばっ！

今まで食べていた食器を台所に投げるようにして置き、鞄を手にとって慌てて玄関に向かう。
玄関にある鏡を覗いて、髪を直す。

よし、行くか。

鏡に向かって一度笑みを作り、私は玄関の扉を開けた。

彼家。1

急いで家の外まで出ると、車に乗った宮越さんが私に気が付き、手をヒラヒラと振っていた。
私は頭を一度下げて助手席のドアに手をかける。

助手席・・・乗っていいんだろうか？

少し戸惑っていると、宮越さんは早く乗れとばかりに、助手席をポンポンと叩く。

彼のその行動に意を決し、私は助手席のドアを開いた。

「お疲れ様です。」

そう声をかけると、彼はわざとグッタリした様子を作り、にやりと笑った。

「疲れたよーでもこれから楽しい時間だからね。そんなのは忘れよう。」

その言葉に、私は笑みをこぼしながら助手席に乗った。

それを確認してから、彼は車のアクセルを踏んだ。

「少し遅くなってごめんね、待った？」

そう言いながら彼は煙草をふかす。
職場ではあまり煙草を吸っている姿を見ないので、私はものめずらしい物を見るようにまじまじとそれに見入ってしまう。

今まで付き合った人は煙草吸ってなかったな・・・

そんなことを思っていると、相馬さん？と声を掛けられる。

「あ・・・待ってないです。ご飯軽く食べてきたので、足りないくらいでした。」

我に返り、慌ててそう返すと、私が何に見入ってたのかがわかったのか、彼は煙草を見ながら苦笑した。

「コレ、職場では余り吸わないんだけどね、本当はヘビースモーカーなんだよ。」

そう言いながら煙草の灰を灰皿に落す。

「私は吸わないので、吸ってる方の気持ちはわからないし、本数とかもよくわからないです。でも、仕事終わった後のプライベートのことだし、いいんじゃないですか？」

そうかもね、と彼は微笑んだ。

「ご飯どうしようか迷ったんだけどね～相馬さん、食べちゃったのなら仕方ないな、俺も家で食べるかな。」

その言葉を聞いて、食べなければよかったと少し後悔する私がいた。そうすれば一緒に食べることができたのかもしれない。が、私のお腹がもってくれなかったのだから・・・しょうがない。

「言ってくれたら待ってたのに。」

そう私がポツリと言うと、微笑みながら「今度一緒にね」と彼は言った。

その言葉に嬉しさを感じつつも、それを隠して「そうですね」と私は相槌を打った。

宮越さんの家は意外に近かった。
私はこの町に住み始めてから、今まで最低限しか外出してこなかった。
なので正直言うと、この町の作りはあまり把握していないのだけど。
私の家からは車で5分ほどのところにある、団地に彼は住んでいた。

ここだよ、と車を止められ、私は車を降り、彼についていく。
少し古い団地の階段を上りながら、彼は「部屋が汚いけど許してね」と照れながら言った。

過去付き合っていた男性の家に入ることはあったけれど、それ以外ではほとんど男性の家になど上がったことがない私。
緊張しながらも、男性の家ってどんなものなんだろう？とすこし興味が沸き「気にしませんから。」と私も笑って応えた。

それらしき部屋の前まで来ると、彼は鍵を取り出してドアを開け部屋に入る。
私もそれに習って部屋に入る。

「お邪魔します」

「汚いところですがどうぞ」

恥ずかしそうに言いながら、部屋の奥に進む宮越さん。

私の素直な感想は、奇麗な部屋ではない・・・というものだった。

玄関を入ってすぐに、季節はずれのスノーボードが雑然と置いてあった。
玄関と繋がっているキッチンは洗っていない食器が山積み。
その奥にある居間にはテレビが3台も並べられており、部屋の中心には申し訳程度にある小さなテーブル。
テーブルの上や周囲には、飲みかけのお茶が入ったコップや雑誌、ゲームの箱、漫画、そしてコンビニ弁当の空箱などが置いてある。

一人暮らしの男性っぽいな。
そんな感想を覚えつつ、私は居間に腰を下ろした。

彼は「汚いでしょ、ごめんね」と言いながら、周囲を片付けながら、私に冷蔵庫から麦茶を出してくれた。
ちらっと見えた冷蔵庫の中に食材は入っていなくて。
ビールばかり。

「宮越さんって、もっとしっかりしてる人なのかなって思ってたけど、そうでもなかったんですね」

気が付けばそんな失礼な言葉が口から出ていた。

彼は片付け途中の手をとめてキョトンとした後、大笑いをしていた。

「仕事は真面目だけどね、プライベートはルーズだよ。男の一人暮らしそのまんまーなイメージでしょ？」

まだ笑いながらそう応える彼。
自分が発した言葉に少し後悔を覚えつつも、気を悪くしてないことに安心して、私も笑いながらそうですね、と返事をした。

しばらくして、部屋の中がある程度片付くと、彼はお湯を沸かしてカップ麺の準備をしていた。

「いつもそんな食生活してるんですか？」

「そうだね～見ての通り、コンビニ弁当とか、カップ麺が多いかな？たまには手料理が食べたい！が、作ってくれる人がいないからしょうがない」

苦笑しながら、宮越さんは私の隣に陣取り、お湯が沸くのを待っていた。

「宮越さんならそういう人いっぱいいそうなのに。変な感じです。」

「相馬さんの中の俺はそんなイメージなの・・・？ひどいなぁ」

わざとらしく泣きまねをして見せる彼に、思わず私は吹き出して笑ってしまう。

「すいません、宮越さんの反応がおかしくて。」

「いや、いいんだよ、笑ってもらえれば。」

そう私に微笑み、沸いたお湯を取りに行く宮越さん。

・・・そんなふうに笑いかけられると、困ってしまう。
好かれているかのような錯覚に陥ってしまうから。
まだ友達としても日数が浅くて、ましてや彼女でもないのに。
そんなに優しい顔で微笑まれると、心臓がドキドキしてしまう。
それを隠すかのように、私はいつの間にか彼がつけたテレビをじっと見つめた。

彼家。2

宮越さんはカップ麺を食べた後、ようやくゲーム機の電源を入れた。そして居間にある本棚からゲームソフトを吟味して、いくつかを私に手渡してきた。

「その中でやりたいやつある？」

手渡されたゲームソフトを見ると、どれも私がやったことのないものばかりで。

「あまりやらないジャンルばかりです。でも、どのゲームも見るのは好きなので、宮越さんがやりたいものでいいですよ。」

そう言って、渡されたゲームを彼に返す。
じゃぁこれで、と彼は一本のゲームソフトをゲーム機に入れた。

「俺が一番得意なやつなんだー。しばらくやってないから上手く出来るかわからないけど、いいところ少しでも見せておこう」

そう言って、彼はにやりと笑う。

彼が入れたゲームは戦闘機に乗って敵飛行機を打ち落とすゲーム。
操作は慣れれば簡単とのことだったが、そういったジャンルのものをやらない私としては、教えてもらう操作方法を覚えるのにいっぱいいっぱいだ。
彼は楽しそうに戦闘機をチョイスし、さっそくゲームを始める。

・・・腕前は、こういったゲームをほとんどやらない私から見てもなかなかのものだった。
出てくる敵機を次々と打ち落としていく。
コントローラーで操作しているとは思えないほど、鮮やかに自機を操っていく。

「上手ですねぇ。」

私は感心のため息を漏らすと、彼は笑って「いいとこ見せなきゃっていったでしょ」と答えた。

私にいい所なんか見せてどうしたいんだろう。
彼は私にどうして欲しいんだろう。

そんな疑問が浮かんでは消えていく。

楽しそうにゲームをプレイする彼を、私はまじまじと横目で見てしまう。

１８０近くはある高い身長。
細身ではあるが、がっしりとした身体。
端正な顔立ちではあるが、意思の強さを表したかのような力強い目。
低めの声。

見れば見るほど惹かれてしまう私。

困ったな・・・どうしよう。

前の彼と別れてすでに2年。
その間、浮いた話がなかったわけではないけれど、新しい恋愛には一歩踏み出せないでいた私。
そう、男性が怖かったのだ。
前の恋愛でひどい目にあって。
男性を信じることができなくなって、どう接していいかわからなかった。
2年経ってようやく傷は癒えてきたけれど、また失敗してしまうんじゃないかと思うと・・・

そんなことを漠然と考えていると、前の彼氏の姿が宮越さんに重なる。
前の彼ともこんな風に遊んだことがあったな・・・

懐かしさを思い出すと同時に、急に恐怖感が私を包む。

別れたいの。
イヤ、触らないで。
御願いだから。
私は何もしてないじゃない！
やめて、お願い・・・

「・・・さん、相馬さん？」

呼びかけられてはっと気が付く。
どうやら私は、彼の顔を見ながらぼーっとしていたらしい。
自分では無意識のうちに握り締めていた拳。
綺麗とはいえない手が、小さく小刻みに震えていた。

「大丈夫？具合でも悪い？」

少し心配そうに眉をひそめ、私の顔を覗き込んでくる宮越さん。

「イヤ・・・大丈夫です。ちょっと考え事していたみたいで。すいません。」

何を考えていたのかなんて話せるわけもなくて。

精一杯の笑顔でそう応えると、彼は思ってもみない返答をしてきた。

「無理、してるでしょ？話聴くよ？」

ゲーム機のコントローラーを持ったまま真っ直ぐに私を見つめる瞳。
そらすことは出来るはずなのに、瞳に捕らわれてしまって身動きが取れない。

「ちょっと・・・昔のことを思い出しちゃったみたいで。」

気が付くとそんな言葉が口から出ていた。
宮越さんには関係ない話なのに。
今まで、ごく一部の友人にしか話してこなかった私の過去の話。

「前付き合ってた人なんです。」

彼の魔法にかかったかの様に、私は宮越さんに言う必要のないことを、ポツリポツリと話し始めていた。

トラウマ（前書き）

この章にはほんの少しですが、性描写、暴力的描写が入ります。そのため、不快に思われる方は飛ばしてお読みください。

トラウマ

前の彼とは三年間の付き合いだった。
私が高校から専門学校の時まで付き合っていた。

始めは、見た目は冴えないけれど、とても優しくて、自分の意見もしっかりと持っている人で、周囲からも好かれる人だと思っていた。けれど、付き合い始めてすぐに彼の本性がわかってきた。

彼は独占欲の塊で、私が男子の友達と話しているだけで嫉妬するような人だった。
付き合い始めはそれでもよかった。
好かれている、心配されていると自信をもてたから。

けど、いつしかそんな彼を疎ましいと思うようになっていった。
女友達と遊んでいても「ほんとは男もいるんじゃないの？友達なんかと遊ばないで、俺と遊んでればいいのに。」そんなメールが来る毎日。

専門学校に入り、彼は大学に行くようになると、すれ違いの日々は増え、ちょっとしたことで喧嘩になるようになった。

クラスメイトとの交流を深めるための飲み会にも参加できず。
普通に遊びにも行けず。

友達とも遊べず。

私のストレスは貯まっていく一方だった。

それを少しでも緩和させたくて、話し合いをしたこともあった。

けれどすべて無駄に終わった。

理緒が心配なんだ。
だからどこにも行かないで。
俺のそばにだけいて。
俺だけを見て。
俺、理緒の友達の〇〇〇ちゃん嫌いだよ。
だってアイツ、理緒に余計なことばっかり吹き込むだろ？

毎日そんなことを言われ続けて、私は次第に病んでいった。

私はあなたの傍に居るのに、何が不満なの？
どうして友達の悪口を言うの？
どうして私の家族の悪口をいうの？
そんな人たちに守り、支えられてきた私を、あなたは好きになったんじゃないの？
あなたは私の何を見て、好きと言ってくれているの？
本当に私のことを見ているの？

私って何・・・？

付き合って一年程で、一度別れ話をしたこともあった。

けれど、彼は応じなかった。

お前は俺だけ見てればいいんだよ！
余計なことは考えるな。

そう彼は言い、私に手を上げた。

それからは地獄の日々だった気がする。

毎日彼に怯え、機嫌を伺う。

私の事情を知っている友達は「どうにかして別れたほうがいいよ」
そんなことを言っていたけれど、怖くて、怖くて。

私の体に対する暴力。
私の心に対する言葉の暴力。

いつしか彼に対する「スキ」という感情は消えうせて、私の中には恐怖心しか残っていなかった。

それでも付き合って三年めの秋、勇気を振り絞って私は言った。

「もう耐えられないの、御願いだから別れて。」

泣きながら懇願する私。

それに対して彼は・・・

「わかった。別れてやるから最後に一回ヤらせろや。」

そう言いながら私に手をかけた。

好きな男性に抱かれるのはいい。
けれど嫌いな人にまで抱かれて、快感を得れるほど私はできてなくて。

イヤ、触らないで。

―うるせぇよ、黙って抱かれてろ―

もう別れるんだから何もしなくていいじゃない。

―別れてやるから最後にするんだろ―

イヤ、ヤメテ。

―手切れ金だと思えば安いもんだろ？―

イヤ。痛いよ。御願い。もうヤメテ。

人形のように弄ばれる私。

イヤだって言っているのに。
どうして彼は私を抱くの？
ただ抱くことができれば、それでよかったの？
私じゃなくてもよかったんじゃないの？
女の人なら誰でも。
じゃなかったら、どうしてこんなひどい事が出来るんだろう。
男の人って皆こんな感じなのかな。

怖い。
痛い。
寂しい。

誰か、助けて。

その後のことはよく覚えていない。

ただ、私の中に残っていたのは、やっと終わった、別れられたという想いと、男性に対する恐怖心と嫌悪感だけだった。

月日が経って、すべての男性が、前の彼のような人ではないことを知った。
彼がたまたまそういう人だったこともわかった。

けれど、私の中の、男性に対する恐怖心と嫌悪感は取り去ることができなくて。
その後、私は男性と付き合うことが出来なくなった。

トラウマ（後書き）

主人公理緒が男性不信に陥った理由の章でした。
本当はもっと旨く書きたかったのですが・・・どうもだめでした（苦笑）

この章はそのうち書き直すかもしれません。

理解

どうして宮越さんに話してしまったのだろうか。
封印したいほど嫌な過去なのに。
何故か彼になら話せる気がして、一通りのことを喋ってしまっていた。

過去付き合っていた人といざこざがあったこと。
それによって、私が男性不信に陥ってたこと。

喋っている間、彼は何も言わずにただ相槌を打ちながら聞いていた。
何を思っているのかは、表情からは読み取れなかったけれど。
今まで胸に閉まっていた過去を話したことで、私の気持ちは不思議とスッキリしていた。

喋り終えた後、私は大きなため息を付いて、苦笑い。

「面白くもなんともない話ですいません。不快にさせちゃいましたかね。」

彼は優しく微笑んで、私の頭をポンポンと撫でた。

「話したいことを話せばいいんだよ。そんなことで俺は不快になっ

たりしない。俺に話したことで、相馬さんはスッキリできた？」

「はい。今まで他の人には話せなかった内容なので・・・聞いてもらってスッキリしました。」

彼の大きな手がとても心地よくて、私は笑みを返した。

「人には誰しも、言いたくないことや言いづらいことがあるからさ。もちろん俺にだってあるし。人に話すことで気が楽になるなら、俺でよかったら何時でも聞くよ。」

「ありがとうございます。」

「しっかしさ、相馬さん若いのにいろんな体験してるんだねぇ～オジサン関心しちゃうわよ」

場の雰囲気を変えるかのように、彼は少しふざけた様子でおどけて見せた。

「あは。そんなことないですよ。でもオジサンって・・・宮越さん、私と年の差そんなにないですよね？」

思わず吹き出しそうになりつつも突っ込みを入れる。

「相馬さんと三つ違いかな。三つも違えばオッサンです」

私は今二十一歳。
なので宮越さんは今の話からすると、二十四歳ってことになる。
まだまだオジサンと言うには若すぎる年。

「宮越さんでオッサンなら私はオバサンです。」

そう返した私と彼の目が合う。

互いに引かない二人。
自然と目が合い、どちらからともなく笑い出してしまう。

私の嫌な過去を知っても、接し方を変えない宮越さん。
何も言わず、私を受け止めてくれた。
それが嬉しくて、私は彼に聞こえるか聞こえないかの小さな声で「ありがとう」と呟いた。

オンラインゲーム

その後も他愛のない話をしながら、私たちはゲームを楽しんでいた。
といっても、私は宮越さんがやっているのを見ているほうが多かったけれど。
それでも充分に楽しい時間を過ごすことができていた。

一息ついた所で、宮越さんがやっていたゲームの電源を落とした。

「じゃぁいよいよ本題に移りましょうか。」

本題？
何のことだろうと疑問符が頭を駆け巡ったが、それを察したかのように彼が口を開く。

「現実逃避、しにいこう。」

そういえば、前にそんなことを言っていたなと考えながら、宮越さんが別のゲーム機の電源を入れるのをジッと見つめる。

「これからやるのはね、オンラインゲームなんだ。『世界樹の雫』ってゲーム知ってる？」

「知ってます。ちょっと気になってはいたんですが、私の家、ネット環境が整ってないので、やれないんです。」

『世界樹の雫』とは、十五年くらい前に発売されたＲＰＧゲーム。ゲーム世代で育ってきた人にとっては、聞いたことが無い人がいないほどの大人気ゲームだ。
現在までにシリーズで十本出ており、いずれも大ヒット。
シリーズごとに世界設定や登場人物が違うが、共通する点は『主人公が世界中を旅し、仲間を見つけながら、自分と敵対する者を倒していく。』というストーリーと、『自分を含めた仲間に、様々な職業を就けて、プレイヤーの好きなパーティー編成にすることができる。』というシステムだろうか。

今でこそそういったＲＰＧゲームは多いが、『世界樹の雫』が初めて発売された当時は、斬新なシステムに多くの人が魅了されたと聞いたことがある。

かくいう私も、このゲームのシリーズはいくつかやったことがあり、いずれも楽しんでプレイした記憶がある。
だが、『世界樹』シリーズの最新作である『世界樹の雫？－オンライン－』は、今までのオフラインゲームとは異なり、インターネットを介してプレイするオンラインゲーム。
ネット環境がない私にはプレイすることが出来なかったゲームだった。

「今日はお試しでプレイしてみるといいよ。俺はこのゲームかなりやってて、これがストレス発散の方法の一つになってるかな。相馬さんにも気に入ってもらえるといいんだけど。」

シリーズ作はやっているが、オンラインゲームはやったことの無い私。
それに対して不安な気持ちが無いといったら嘘になる。

「オンラインゲーム、やったこと無いですけど大丈夫ですか？」

戸惑いながら問うと、彼は笑って平気だよ、と返答してきた。

そうこうしてる間に、テレビ画面はゲーム開始の画面になる。
彼はいくつか画面を勧めながら、ある程度のところで私にコントローラーを渡した。

「まず、やらなきゃいけないことは、これからゲームをするにあたってのキャラクターを作ること。自分が好きな種族、髪型、髪の色、あとは職業なんかを決めてね。」

ようは、これからゲームの世界に旅立ち、ゲーム内で私の分身として活動をするキャラクターを作れということらしい。
私は彼に言われたように、自分の好みのキャラクターを作り上げ、彼にそれをチェックしてもらう。

「今日はお試しプレイだから、どんなのでもいいんだけどね。本格的にやることになったら、また随時説明はしていくよ。選んだ種族とか職業・・・ジョブによって、どんなことが得意かとか、色々あるんだ。」

なかなか複雑なようだが、とりあえずキャラクターを作り上げ、オッケーサインをもらった私は最後の名前を入力する部分で迷ってしまう。

「これ、何でも好きな名前入れていいんですか？」

「そそ。すでに他の人が使ってる名前は使えないけどね、自分の好きな名前入れてみて。」

ちなみに、彼は宮越比呂から取ったのか、Ｈｉｒｏ（ヒロ）というキャラクターを使っていると説明してくれた。
じゃぁ私も。
と言わんばかりに、理緒からとったＲｉｏ（リオ）という名前を入力する。

―Ｒｉｏでゲームを始めます―

テレビ画面にそんな文字が浮かび、いよいよゲームを始める事にな

った。

初プレイ（前書き）

今後、現実（リアル）と仮想現実（ゲーム内のヴァーチャル世界）の話が交錯していく予定です。

そのため、今がどの世界での話しなのかがわかりにくくなる可能性があります。

少しでも読みやすくするために、小説の冒頭に、現在がどこを舞台に話が進んでいるのかを簡単に書いて行きたいと思います。

試験的に行うため、今後もっと見やすい方法があれば、そちらに修正していくかもしれません。

初プレイ

■◇■　ユグドラシル内　■◇■

目を開けると、そこは見知らぬ街中だった。
目の前には大きな噴水があり、噴水がある広場を中心として、十字に大きな道があり、商店街や住宅街が多く立ち並んでいる。
多くの人々が広場を経由して、東西南北に行き来していた。

行き来しているのは、現実（リアル）世界では見たこともない姿をした人々だった。
人間と猫が混じったような姿をしている人や、背がとても高いが細身で耳の尖った人。
丁度人間の子供のような姿をしてはいるが大人だと思われる人。
身長も体格もがっしりとはしているが尻尾の生えた人。

様々な種族の人が、様々な衣装を身に纏っていた。

私は噴水のすぐ傍まで行き、水に映った自分の姿をまじまじと見つめる。
私はというと、人間の姿そのまま。

ここでようやく一つのことを思い出す。

―あぁ、これが宮越さんが言っていた『自分のキャラクター』なのだと。―

リアルとは異なり、金色でボブショート髪型。
今着ているのは、ノースリーブのポロシャツにも似ていたが、所々皮で補強してある上着に、ジーンズのショートパンツと、膝まである皮のブーツ。
腰のベルトには、棍のようなものがくくりつけられていた。
胸元にはバッチのようなものがついており、それが様々な色に変化している。

ここまで自分の状況を理解したところで、一人の男性に声をかけられた。

「リオちゃん！」

この世界に降り立ったばかりの私には、知り合いなど居ない。
誰だろう？と不思議に思いながらも、声がした方向に首をめぐらせる。

そこには、短髪の男性が立っていた。
上質の格闘着を着ていて、とても強そうに見える。

「貴方は・・・？」

私が不思議そうにその男性を見ると、彼が笑って応えた。

「俺、宮越だよ、ユグドラシル内ではヒロってなってるけどね。」

彼があの宮越さんらしい。

「リオちゃんがログインした後に、俺もログインしたんだよ。リオちゃんと色々遊ぼうと思ってね。」

まだいまいち状況がつかめない私は、はぁと間抜けな返答をしていた。

「ログイン？してみたものの、何をどうすればいいかまったくわからないんですけど。」

そう質問する私に、待ってましたとばかりに彼が表情を明るくして応える。

「うん、だから色々教えようと思ってね。こっちついてきて！」

その後、ヒロさんは私をいろんなところに案内してくれた。
今いる町のこと、外の世界のこと、他の人と連絡を取る方法。
外で戦う方法、自分が休む場所のこと。

そんなことを説明されながら、様々な場所に案内される私。
でも今の私には聞くことと、質問することしか出来なかった。

彼が説明してくれたことを纏めると、現在私がいるこの世界は『ユグドラシル』という世界らしい。
ユグドラシルには、大きく分けて四つの国がある。
現在私がいる国、産業大国アルド。
ヒロさんがいる国、伝統と騎士の国エンヴィ。
占いや魔法に長けた魔法大国スバリア。
この三つの国は、過去に領地を拡大すべく大きな争い事が耐えなかったようだが、現在は互いに不可侵条約を結んでいる。
そしてこの三つの国から流れた人たちが作った国、ファイス。

アルドには、主にヒュームと言われる人間型をした種族と、とても体格がよく太い尻尾が印象的なダルガンと呼ばれる種族がいる。
エンヴィーには、身長が高くすらっとした体型で、耳の尖った種族エルフ。
スバリアには、成人しても子供くらいの身長にしかならない種族ホビッツと、人型をしてはいるものの猫耳が印象的なミズランという

種族。

それぞれの国は、それぞれの種族の人が統治している。

初めてユグドラシルに降り立った人は、『冒険者』としてアルド・エンヴィ・スバリアのどこかに所属し、町の外にいるモンスターを倒し、自らのレベルを上げていく。
それと同時に、国や人から請け負った仕事をこなし、お金を稼いだり、宝物を手に入れたりして、自らを高めていく。
自分のレベルが上がれば、請け負うことができる仕事が増えたり、仕事自体も簡単にこなすことができるようになるらしい。

国からの仕事はミッション、個人からの仕事はクエストと呼ばれ、場合によっては複数人でパーティーを組んで強力しあうこともある。

ざっとこんな説明を聞き、あまりの複雑さに頭が痛くなってきた私。こんな難しそうなゲームをすることが出来るんだろうか・・・

「私、ちょっと心配になってきました。難しくて何をどうしていいやら・・・」

一息つくために訪れた、町が一望できる丘の上で、隣に座っていたヒロさんに素直な気持ちを打ち明ける。

「何事も慣れだよ。今はわからないことが多いと思うけど、俺もできる限り教えるし。ミッションやクエストはやるもやらないも冒険者の自由なんだ。冒険しないで、ただ仲良くなった人とおしゃべりをするもよし、モンスターを倒して手に入れることができるアイテムを加工して、いろんなものを作る職人になるもよし。ユグドラシル内には風景のいい場所がいっぱいあるから、そこを回ってみるのもよし。何をやるにも自由なんだよ。だから、リオちゃんがやりたいことをやればいい。」

リアルで私が過去の話をした時に慰めてくれたように、彼はあたしの頭をポンポンと撫でながら、そう言った。

胸中は不安で一杯だったが、ヒロさんがいてくれたら少しづつ出来るようになるかもしれない・・・そんなことを思いながら、私は町を眺めていた。
ユグドラシルの中は今夕方。
空には、ゆっくりと夜の帳が落ち始めている。
丘から見えるアルドの町も、夜の準備をするべく、ぽつぽつと店や家に灯りが点り始めている。

「ほら、あっち見て。」

そうヒロさんが促した方向を見ると、アルドの町の遥か奥に大きな満月が昇ってくるところだった。
薄暗くなる中、ぼんやりと明かりがついてゆく町。

その背景にあるのは大きな満月と、リアルではめったに見れないような澄んだ星空。
こんな奇麗な景色を見たのは何時ぶりだろう・・・。

「ユグドラシルには奇麗な景色いっぱいありますか？」

ポツリとそう漏らした私。

「うん、リアルでは見れないような景色、いっぱいあるよ。」

ヒロさんも、それに静かに答える。

「こんな奇麗な場所が他にもあるなら・・・私見に行きたいです。」

その言葉に、ヒロさんは何も言わずに、嬉しそうに頷いていた。

デート言う名の

■◇リアル◇■

宮越さんの家に遊びに行ってから早一週間以上が経っていた。
あの日、『世界樹の雫』で遊び、私は深夜に帰ってきていた。

今までやったことのない、オンラインゲームという世界。
とても複雑で、私には出来ないと思っていたけれど、宮越さんのおかげか、今まであった苦手意識はなくなっていた。

ただ、あの時やったのは試験的なもので。
本格的にやろうと思ったら、自分でゲーム機を買い、ソフトを買い、インターネット環境を整えなければならないというハードルがあった。

そこまでしてやる価値があるのかはわからなかったが、ゆくゆくは部屋にネット回線を引きたいと思っていたので、翌日、私はロバイダー契約や回線工事の日程を決めることになった。

今もそれなりには宮越さんとの仲は良いけれど、これをきっかけにもっと仲良くなれるような気がして。
そして何より、今の私にはストレス発散の方法が必要だったから。

今までも自分の趣味でストレス発散をしてきた私にとっては、ゲームでストレス発散をするということに対しては、あまり抵抗が無かった。

いつものように仕事をしていると、やはりいつものように宮越さんが作業部屋に来室してきた。

「相馬さん、近いうちネット繋がるって言ってたよね？」

「はい、明後日くらいには繋がると思います。」

「そっか、それなら今週末にはネット環境整うね。」

自らのことのように、喜びながら話す宮越さん。

そうですね、と相槌をうちながらも、私は部屋の片づけを続ける。

「それならさ、ネット繋がった日にでも、一緒に買い物でも行こうか。」

例の物を買いにね、といたずらっ子のように私にウィンクしてみせ

る。

今の一人暮らしの家に、ゲーム機はないので、それを買いに行こうといっているのだろう。
ネットをつなげるのと同様、そのうち買おうと思っていた私には、それもあまり抵抗の無いことだった。

「いいですよ？」

私のあっさりとした返答に少しビックリしたのか、一度彼は目を丸くした後、恥ずかしそうにしながら頬を掻いた。

「半ば冗談だったんだけど・・・ほんとにいいの？」

今まで散々私をゲームに誘っておいて、言っていた本人がビックリしているのだから呆れてしまう。

「誘ったのは宮越さんですよ？」

私は意地悪気に宮越さんに笑いかけ、せっかくですからやりますよ、と返事をした。

「じゃぁ週末はデートね！」

またね、と手を振りながらすごい勢いで部屋を去っていく彼。

・・・去り際の、彼の頬が少し赤く染まっていたように見えたのは、私の見間違いだろうか。
何にせよ、また週末に出かけることになってしまった。

嬉しいやら恥ずかしいやら、複雑な心境を胸に、私は週末を迎えることになる。

買い物（前書き）

前回投稿分から、後半を少し加筆しました。
間がだいぶ空いてしまってすいません＞＜

買い物

■◇　リアル　◇■

数日前にやっとインターネットの環境が整った。
パソコンはすでにインターネットに繋げたので、繋がってからは毎日のようにパソコンをいじる日々が続いている。
元々機械類には強いほうだが、一からセッティングするのは初めてのことだったので、今は毎日が楽しかったりする。
新しいソフトを買ってきて入れてみたり、ネットサーフィンしてみたり。
そんなことをしていたら、あっという間に時は流れ、週末になってしまった。

今日は宮越さんとの約束の日。
前の日、少し夜更かししたので、まだ布団に入っていたいという気持ちを押し込めながら、ベッドから出て、出かける準備をする。

準備が整っても、何故か落ち着いてくれない、私の気持ち。
これから宮越さんとデートという名の買い物に行くのだが、どうも緊張してしまう。
何もあるわけがないのに、宮越さんと休日に一緒にいれるというのが嬉しい。

ピリリリ・・・

携帯の着信音が、宮越さんの迎えを知らせてきた。
私は準備に抜かりがないかを鏡で確かめて、家のドアを閉めた。

「こんにちわ。」

助手席に座ると、やぁと軽く手を上げながらゆっくりと車を走らせ始める宮越さん。

「今日はいよいよ買い物だねぇ～そういえば、インターネットは繋がったの？」

「はい。無事この間繋がりました。最近はパソコンばっかりいじってます。」

よかったよかったと、片手で煙草を吸いながら車のハンドルを握る彼。

「理緒ちゃんはパソコンとか詳しいの？」

「弱くはないですね～大抵の電化製品なら説明書とか無しでも使えますね。パソコンも人並み程度には使えると思います。」

「うらやましいな、今度さ、調子が悪いうちのパソコンの様子見にきてよー」

相当困っているのか、御願い！と私に懇願してくる。
私はそれに、私でよければ、と頷きながら控えめに返事をした。

そうこうしている間に車はドンドン進み、予定の電気屋に到着した。
エンジンが止まったのをみて、車を下りると・・・

「あれ、何だっけ・・・相馬さん？」

後ろから聞こえたのは女性の声。
地元でもないこんな土地で、私に声をかけてくる人なんてメッタにいないのだが、聞き覚えのある声だったので後ろを振り返る。

「あ・・・どうも。」

私の後ろにいたのは、丁度買い物を終え車に乗り込もうとしていた、職場の年配の看護師さんだった。
意外なところで会うものだと、内心少し驚きながらも、軽く会釈をして先を行こうとした時。

「あれ、宮越さんと一緒・・・？」

一緒の車から宮越さんが出てきたのを、目を丸くして見つめる看護師さん。
私と看護師さんのやり取りに気が付いた宮越さんも、驚きながら看護師さんに挨拶をしていた。

「いやぁ～どうもどうも。こんなところで会うとは奇遇ですなぁ。もうお買い物は終わったんですか？俺達はこれからですので、失礼しますね～また明日職場で。」

相手に二の句を言わせないようなスピードと満面の笑顔で挨拶をし、素早く店の入り口に向かう宮越さん。
私も看護師さんも、彼に圧倒されて言葉も出なかったが、じゃぁ・・・とだけ挨拶をして、宮越さんを追った。
背中に視線を感じながらも、宮越さんに追いつき店内に入った。

店内に入ると、先ほど店内に向かっていったスピードが嘘のように、ゆっくり歩いている彼。
まるで私が来るのを待って、私に歩調を合わせてくれているかのように感じてしまう。

・・・何考えてるんだろ。
どうも彼が隣にいると、優しくされているような気がして、必要以上に意識してしまう。

ただの・・・ゲーム友達なのに。

私は、彼にとって『ただの友達』と自分にいい聞かせながら、平静を装って彼の隣に並ぶ。
そう、期待はしちゃいけない。
期待して、裏切られた時に傷つくのは私だ。
そして、やっと見つけた友達になれそうな人を、私の期待で困らせてはいけない。
邪魔だとか、迷惑だとか思われて、この関係を終わらせたくないから。

「意外なところで看護師さんにあったねぇ・・・あれは予定外だった。」

先ほどの満面の笑顔ではなく、とても真剣な顔をしながらも、目的の物を探していく宮越さん。
その言葉に、何か裏があることを感じ、私は彼に真意を問おうとする。

「あの・・・」
「ここで看護師さんに会うのはまずかった。きっと明日になったら、職場で変な噂たてられてる。俺は気にしないからいいけど、相馬さんが困っちゃうよね。ごめん、配慮が足りなかった。」
「噂ですか？」
「そう、あの職場ってさ、町が小さいのもあってすぐに噂広まっちゃうんだよ。看護師さん達なんて、人の色恋沙汰とか大好きだから、

さっき会ったのも変に誤解されて噂にされちゃうかも。」

ごめんねと、再度私に向かって頭を下げる。
私は慌てて彼の頭を戻し、大丈夫です、と笑顔を向ける。

「宮越さんがそこまで気にすることじゃないです。ただ買い物に来ただけなんだし、悪いことは何もしてないでしょ？だから平気。胸張ってたらいいんです。」

でも・・・と言葉を続けようとした彼の言葉を遮り、
「さ、物探してさくっと帰りましょ！」

もう一度彼に笑顔を向けて、目的の品を探しに向かう。
少し呆気に取られていた彼も、笑顔で「おう！」と私の後をついてきた。

買い物（後書き）

前回更新からだいぶ間があいてしまいました。
また少しづつではありますが、更新していきたいと思いますのでよろしく御願いします。
感想、誤字脱字などもお待ちしています！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2876i/

境界線－リアルとネットのその間－

2010年10月11日13時46分発行